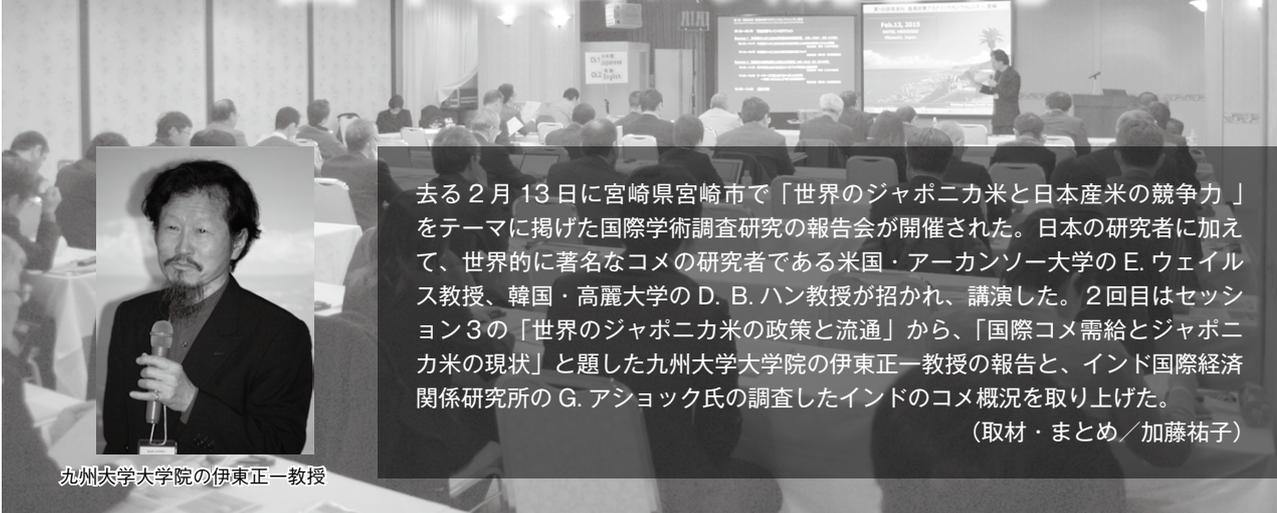




世界のジャポニカ米と 日本産米の競争力



九州大学大学院の伊東正一教授

去る2月13日に宮崎県宮崎市で「世界のジャポニカ米と日本産米の競争力」をテーマに掲げた国際学術調査研究の報告会が開催された。日本の研究者に加えて、世界的に著名なコメの研究者である米国・アーカンソー大学のE. ウェイルス教授、韓国・高麗大学のD. B. ハン教授が招かれ、講演した。2回目はセッション3の「世界のジャポニカ米の政策と流通」から、「国際コメ需給とジャポニカ米の現状」と題した九州大学大学院の伊東正一教授の報告と、インド国際経済関係研究所のG. アショック氏の調査したインドのコメ概況を取り上げた。

(取材・まとめ/加藤祐子)

セッション3

世界のジャポニカ米の 政策と流通

① 国際コメ需要とジャポニカ米の 現状

～円安と国内相場弱含み
で日本のコメに国際競争力

(九州大学大学院農学研究院・
教授伊東正一氏)

この報告のポイントは、世界のコメ生産と流通、国際ジャポニカ米価格の高騰、日本産米の国際競争力、韓国米の現地状況の4つである。それぞれの項目別にまとめる。

● 世界のコメ生産と流通

世界の食糧(コメ・コムギ・コーン・大豆)の1961年～2014年までの生産状況を図1に示した。60～70年代はコムギよりトウモロコシのほうが多かった。それに比べて、その後のトウモロコシの生産量の増加は驚くべき状況である。エタノール生産などの需要が増えたわけだが、国際価格が低いと生産量が減るというように、世界中の農家が経済の感覚を持って農業をしていることが言えるだろう。

このような状況は逆に価格高騰による生産拡大も引き起こす。06～14年の間の変化を眺めてみると、人口は10%伸びておらず、現在は世界で

約72億人。その間にコメの生産量は14・3%伸びて、コムギが20%、そしてトウモロコシが40%近くも伸びて、10億tに届く勢いを示している。大豆も3割近く伸びている。

コメは90年代後半に価格が高騰し、もの凄く速いスピードで増産となった。しかし、需要が追いつかないということ、00年前後にかかり暴落した。今も値段が下がりかかっているなかで増産しているの、価格の下落を懸念している。

世界のコメの貿易量を図2に示した。ジャポニカ米もインディカ米も合計した量だが、06～15年までは値段が高く、急速に伸びている。08年はインドをはじめ、いろいろな国が品種を出して、値段が高騰した。インドは特に変化が非常に大きかったが、輸出禁止令を出したところ、国内価格が暴落して、輸出が避けられない状況になり1000万tを超す輸出に転じた。ちょうどタイが輸出政策に失敗したタイミングと重なり、インドは2年間、世界第一位のコメ輸出国になった。

その他の国はというと、米国の輸出はここ数年、横ばいに推移している。タイは政策を切り替えて、再び1000万tを超す出荷量で背秋の第一位の座に戻っている。

図2：世界及び主要国のコメ輸入量の推移（1960-2015）

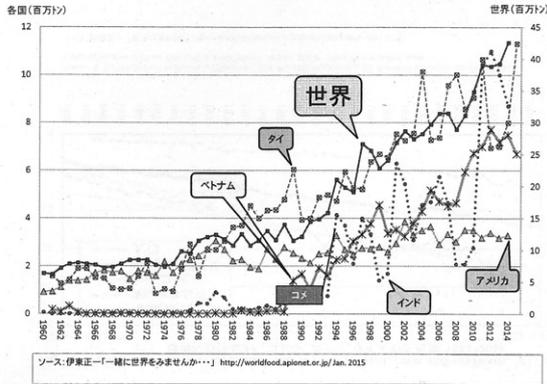


図1：世界におけるコメ、コムギ、コーンダイズの生産量，1961-2014

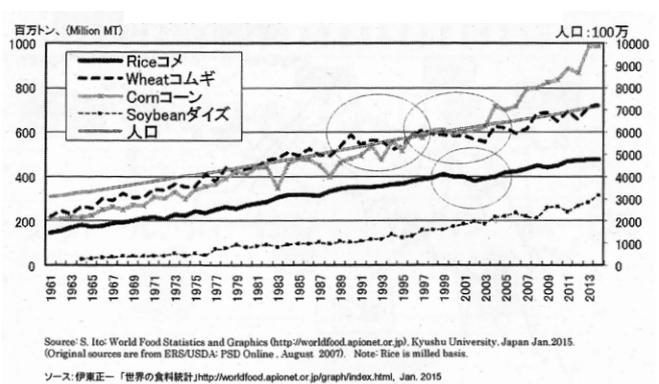


図4：原油と穀物における日々相場の推移 (NYMEX, CBOT), July 2, 2007-Feb. 2 2015

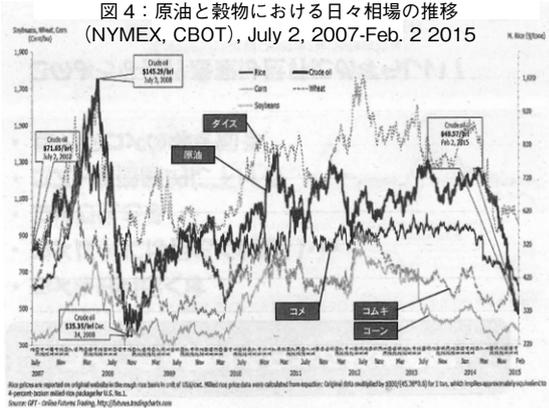
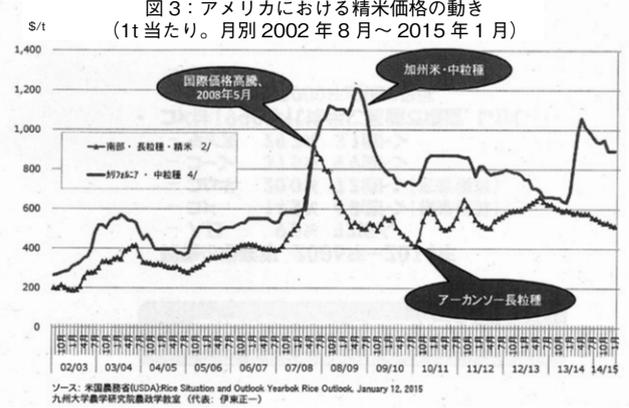


図3：アメリカにおける精米価格の動き (1t当たり。月別2002年8月～2015年1月)



●国際ジャポニカ米価格の高騰

次に価格の話に移る。図3に米穀における精米価格の動きを示す。07～08年に国際価格が高騰した際に、08年5月がピークだったと言われたが、それに続いて長粒種のインディカ米は下がった。しかし、ジャポニカ米はもつと高くなるという状況だった。これは、カルフォルニアの生産者のグループが、これから日本が買いに来るだろうということで強気に価格を下げないとしたことなどが影響した面もあったようだ。その年が明けると、その値段も下がった。本来はジャポニカ米とインディカ米の価格には差があるという情勢である。昨年7月からの値上がりは、カルフォルニア産米の干ばつによる生産減が判明したためだった。しかし、その後価格が下がっても、インディカ米との価格差は以前より大きいままである。

ジャポニカ米が高騰するなか、インディカ米は下落している。タイの輸出拡大政策で、国際価格がさがったという状況が反映されている。タイの値段が下がると、米国のコメの値段にも影響する。

世界の食糧価格のメカニズムをグラフに表わすために作成したのが、図4である。07年～最近までの日々相場、シカゴ相場、原油の価格を記

している。原油が高騰すると、それに引っ張られて、コメもコムギもダイズもすべての値段が上がって、原油が下がると、穀物も下がる。

さらに国際市場では、コメ、コムギ、コーン、ダイズ、この4つの穀物価格は連動して動くので、コメだけが高い価格を維持するのは難しい。それぞれの品目に多少の差はあっても、全体が下がればコメも下がるといふ傾向を示す。

少し長いスパンで米国のコメの価格を眺めてみたのが図5である。日本がM/A米として輸入を始めた95年から、その後は顕著にカルフォルニア米のほうがアーカンソーの長粒種より高くなっている。それ以前はお互いの価格が拮抗していただけに、日本をはじめ韓国や台湾がカルフォルニア米を中心にM/A米という形で輸入するようになり、一定量の需要ができたことが、カルフォルニア産米は安定的に高い価格を継続していると考えられる。

ウェルズ先生の講演でも触れると思うが、米国の14年農業法のなかでジャポニカ米と正式に呼ぶようになった。米国の農業法は影響力が大きいく、ジャポニカ米を世界的にしつかりと認識してもらえようになるのではないか。

カルフォルニア産の中粒種という



図5: 米国の各産地(アーカンソー・カリフォルニア)における精米工場FOB価格
(\$/cwt, bagged) (月別1976年8月~2014年2月, 精米100ポンド袋詰め)

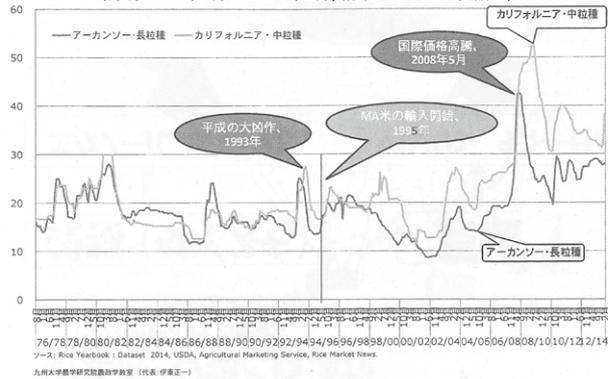
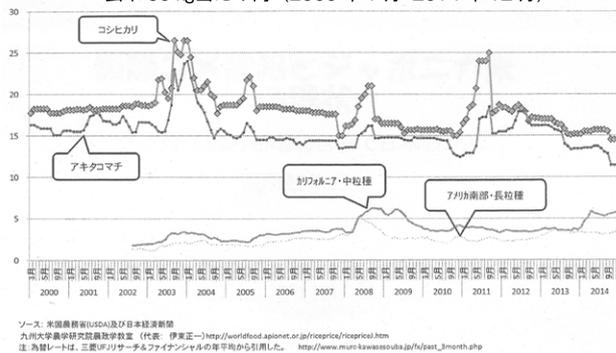


図6: 日本とアメリカにおけるコメの国内価格の比較、
玄米 60 kg 当たり円 (2000年1月-2014年12月)



● 韓国米の現地状況

最後に、昨年12月から今年1月ま

現状、日本国内ではコメの価格が低迷している。しかし、その一方で円は上昇している。ということは、日本産に対する期待、日本産米に競争力が出てくるのではないかと考えることもできる。輸出拡大のチャンスであり、新しい市場を開発していかなければならない。輸出の可能性を日々努力しながら探さなければいけないだろう。

相互の情報を取り入れながら、輸出入や競争をするのがいいだろう。

滞在中にソウル市内のスーパーマーケットに出かけてみると、米売り場には精米機が置かれていた。玄米が袋に入っていて、その場でそれを精米機に入れて、提供するやり方があるようだ。日本では米屋ではそのやり方をしていないが、スーパーマーケットではそこまでやっているという話は聞かない。店頭価格も日本と変わらない。韓国の稲作農家は力が強く、値段も増加する方向で推移していると聞くが、近隣諸国では、輸出入や競争をするのがいいだろう。

ジャポニカ米に関しては、米国でも南部のコメより高い価格が示されている。ジャポニカ米を輸入する側から見れば、高い価格で買うことにならるので、嬉しい話ではない。しかし、ジャポニカ米をつくる農家にとつては嬉しいことで、高額で推移するために、ジャポニカ米の増産を画策する動きは広がっている。

世界的な日本食ブームは米国でも今も続いている。そういうなかで、中国や米国・ベトナム・ブラジルがジャポニカ米を生産して輸出しようという動きが大きいだらう。

これまでの長粒種米の産地でも、ジャポニカ米を何とかしてつくりた

いという話はある。米国でつくりやすいのは「M205」という品種だが、カルフォルニアが州外での生産を許可しておらず、同じ米国内でもアーカンソーでも作れないというジレンマを抱えている。

● 日本産米の国際競争力

このような状況のなかで日本の稲作農家は どうしていいのか。国内での競争をしながら、コストを徹底的に下げる。そういう努力を農家ができることが重要である。

日本の農家は、たいてい自分のコメの味を知っている。韓国や台湾でも、自分でつくったお米を食べてい

るところが多いので、似たところはあるが、米国などは、自分でつくったお米を一般的には食べない。そういった意味では、日本の稲作農家は非常に力があると思う。

日本のコメ相場は現在、値段が下がっている。このように下がっている状況を見ると、もう市場の最低の値段まで下がっているのではないかと感じるだろう。では、これを実質価格で見よう。

日本と米国におけるコメの国内価格を比較したのが図6である。外国のコメの値段が為替レートに関係もあり、値段が上昇していて、日本産米との価格差が小さくなっている。つまり、日本のコメの輸出は、今以上に大きなチャンスを得られるだろうと考えられる。

また、韓国では今年の1月から関税化を始めた。既に韓国からも沢山の農産物の輸出はあるので、日本のコメを韓国に輸出すると面白い結果になるのではないだろうか。韓国でもコメの消費量は下がっている。日本のコメと韓国のコメの食べ比べを両国でしていただきたい。

滞在中にソウル市内のスーパーマーケットに出かけてみると、米売り場には精米機が置かれていた。玄米が袋に入っていて、その場でそれを精米機に入れて、提供するやり方があるようだ。日本では米屋ではそのやり方をしていないが、スーパーマーケットではそこまでやっているという話は聞かない。店頭価格も日本と変わらない。韓国の稲作農家は力が強く、値段も増加する方向で推移していると聞くが、近隣諸国では、輸出入や競争をするのがいいだろう。



図7：世界のコメ生産量・輸出量・輸入量の構成比（2011-2012年）

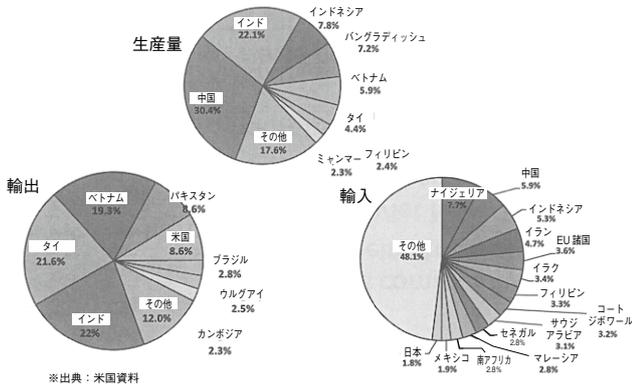


図8：インドのコメの輸出額と輸入額（2001-02年～2012-13年）

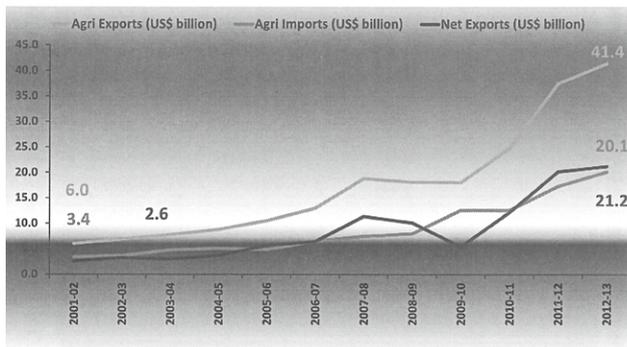


図9：コメのインド国内価格と国際価格

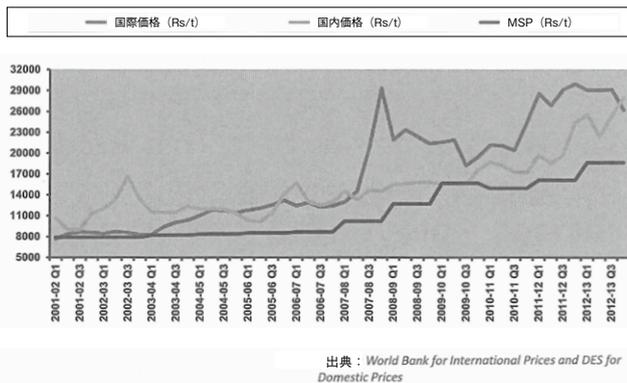
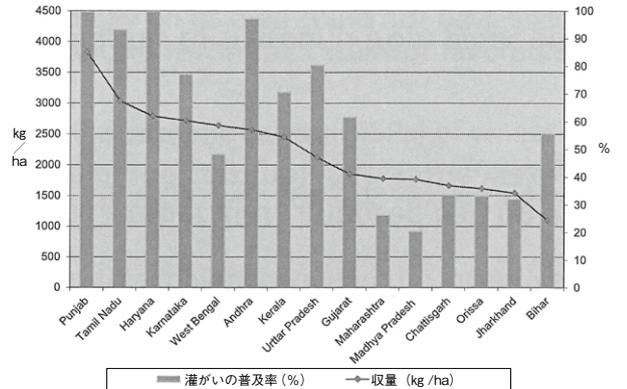


図10：インドのイネ収量と灌がい普及率（地域別，2010～2011年）



※図1～10はいずれも当日の配布資料および報告書より抜粋し、掲載した。英語表記は編集部にて訳した。

②インドのコメ概況
 (インド国際経済関係研究所 G.アショク氏) ※来日を見合
 わせたため、代理で伊東正一氏
 が報告した
 インドは今、輸出に力を入れてい
 るように思う。生産も伸びていて、
 精米で1億tのレベルに達した。
 世界の生産量は中国が1位で全体
 の約3割を占める。次いでインドが
 22%。図7は11～12年の数字なので
 タイが大きな数字を占めているが、
 ベトナム、米国が生産を伸ばしてい
 る。いずれにしても、インドのコメ
 は世界的に大きな存在になってい
 る。

図8は農業の輸出と輸入、いわゆ
 る純輸出を示す。純輸出とは農業の
 輸出額と輸入額の差で、外貨獲得の
 目安を表す。近年、純輸出額が非常
 に大きくなってきている。これはイ
 ンドだけでなく、農業国、米国を含
 んで同じ傾向があり、ブラジルは特
 に顕著な状況である。この意味では、
 国際価格の上昇は農業を中心とする
 発展途上国にとってはむしろプラス
 になったのではないか。インドもそ
 の例に漏れていないことから、農
 業が産業として重宝されている印象
 を受ける。
 アショク氏はインドの輸出政策
 の不安定感を指摘している。08年に

バスマティ品種を除く輸出禁止令
 が出ていたが、その後、輸出拡大路
 線に転換したことで輸出が伸びてき
 ている。したがって、今後も安定的
 に輸出拡大が図られるかどうかはわ
 からない。タイは歴史的にも世界最
 大のコメの輸出国というものの、せ
 いぜい2000万tくらいである。
 中国やインドなど1億tクラスのコ
 メ生産をしている大国が輸出に本気
 で乗り出した場合、驚異的なスピー
 ドで動く予想される。
 次に図9には国際価格とインド国
 内のコメの価格を示した。国内価格
 が徐々に上昇していることがわか
 る。国内価格が国際価格より高くな

ると、輸出がやりにくくなる。今後
 は碎米が25%入ったタイ米の価格と
 比較することで、輸出競争力を持つ
 ための対策を練る必要がある。
 生産状況については、図10に収量
 と灌漑設備の普及率を地域別に示し
 た。良いところで1ha当たり4t弱。
 悪いところだと2・5tという状況
 である。さらに、稲作の約6割が地
 下水に頼っていることから、まだま
 だ技術のレベルアップが待たれる。
 最後に食糧安全保障の観点から
 は、07年のコメ価格が高くなり始め
 たところで国家食糧安全法を作成
 し、その後6年間で4200万tの
 増産を遂げた実績が報告された。